

日本人の、日本人による、日本人のため にならない捏造——VII

中国の旅——3 三光政策

「私は、河南省僕陽県の李家莊を中心とする部落を攻撃するため、1941年5月9日の深夜、大隊の総員800名をひきいて、暗夜を利用して行動を始めた」と小田少佐の手記ははじまる。……三光のあらすじは、北支（華北）に駐留した63師団隷下の独立歩兵78大隊長小田二郎少佐が手記としてのこし、「作り話」として明確なシグナルを意識的に忍ばせたもので、残虐度は低いが、日本人が初めてこの言葉に接したという記念碑的なもので、多くの歴史教科書に記載されている「三光作戦」の原点である。

南京大虐殺は、「大量の南京市民や武装解除した投降兵、捕虜を無差別に殺した」が「軍の最高方針による計画的虐殺事件ではなかった」。だが、八路軍の活躍が目立ち始める1940年（昭和15年）頃から、「三光作戦」としての皆殺し、「三光政策」としての計画的虐殺が本格化し、「住民と密着し、その強い支援で活躍する共産軍ゲリラに対して、日本軍は、ドイツ＝ナチスがやった報復虐殺と同様、女子供を含む皆殺し作戦をもって応じた」と本多は書いている。

指導書（三省堂「高校日本史」）を例にとると、「……ゲリラ作戦に苦しめられた日本軍は、1940年頃から華北を中心に三光政策を実施した。……侵略軍の残酷さを示している」とした解説を付けて、残虐度のもっとも高い箇所を長々と引用しているのは、「南京大虐殺」の場合と同じである。

### 三光

以前にも書いたけれども、日本の戦略・戦術に、中国語を使うことはありえない。だから、三光政策というのは、中国の表現をそのまま使用しているだけで、日本軍なら違った表現を使う。逆に言えば、そういう作戦はなかった、ということである。

検証するには、手記が数多くありすぎて、何人かの偽証をまとめるのがわかりやすいと思う。当然、先に述べた中帰連が主体となる。

小田少佐の手記にある李家莊を中心とした部落を襲撃する話であるが、「私は天皇崇拜よりくる凶暴性と、中国人民に対する蔑視感から、中国人を虫けらのごとく考えていた」と自ら記す。で、村を襲うと20～30人の老人子供を残して皆逃げた。たまたまいた住民を拷問したが、白状しないので殺した。ここが八路の一部（？）で、ナツメ林がある。この2500本の藁林を全部切り倒したら住めなくなる。当然村から略奪し、抵抗する者は射殺する。原駐地に引き揚げる際、70戸、50戸、80戸の部落を残らず焼却する。少佐は「ざま見やがれと腹の底から、さも憎々しげにつぶやいた」というのである。

どの手記にも共通する特徴が見られる。書き手の視点が移動していて、自分を描写するのにも第三者から見たとしか思えないような不自然な表現が現れることである。

少佐の手記の最後でも、「残忍な顔をひきつらせながら」と自分を形容し、「憎々しげにつぶやいた」と表現するだろうか。

登場者本人はもちろん、渦中の部隊にいた人がこれを読めば、デッチ上げであることがただちに了解される。少佐が手記を書かねばならなかった立場に追い込まれたため、部下に作文であることがわかるように、矛盾に満ちた内容を用心深く書き上げたのだ、とも読み取れる。

では、何を理由にデッチ上げと判断できるのか。大別すると次の2点に集約できる。

1 点は、記述された時期、場所、登場人物の組み合わせが大きな矛盾を持ち、単なる記憶違い、錯誤によるという解釈では説明がつかない。

もう1点は、残虐行為の唐突さである。

矛盾に満ちた部隊編成がみられること、部下は、敵性部落というより陣地そのものと説明する。さらに、「部落を焼くことはしなかった、三戒（焼くな、犯すな、殺すな：今村均大将）を完全に守った」と語っていること。われわれは、治安を保つことが目的で拷問などやらない。

……のちに、これが「三光作戦」と名付けられるなど、小田少佐は思いもよらなかった。

## 「手記」と「天皇の軍隊」の記述

### 731 部隊「コレラ作戦」

1943年9月、山東省臨清県の中心地帯に大雨が降り、衛河という幅数十メートルの運河が決壊しそうになり（中国側は、日本軍が堤防を破壊したという）、手を尽くしたが決壊してしまった。このとき731部隊からコレラ菌が提出され、これを撒布して中国人を根絶やしにすることを考える。その結果、2万人とも20万人ともいわれる犠牲者がでた、というものである。

以上が難波博少尉の「手記」と「天皇の軍隊」が描く事件の骨格である。後者では、コレラ菌を詰めたカン詰め爆弾を飛行機からばらまいたという。コレラ菌の影響をみるためである。

日本軍が堤防の補強に来た、と思ったら、わざと決壊させたというのであるが、960平方キロ以上の地区が水につき、被災者70万人、水害、餓死、コレラ感染などで32300人以上が死亡したというものである。

これは、一読、小生にもわかる。コレラ菌の缶詰を自分も汚染されずにどうやって開封するのだろう。被災地域には、日本兵も大勢いたはずである。この処置はどうするのだろう。飲料水の問題もでてくる。まあ、有り得ない話である。

西沢勘作曹長は歩兵砲中隊の実質的な生みの親で、中隊の生き字引である。この人が知らない間に見習い士官がどうのこうのすることではない。強制的に手記を書かされたのだろうと手紙で質問したが、返事がなかった。

この時期、あちこちでコレラが蔓延していて、中隊の中にも保菌者がいたので隔離した。

手記を書いた連中が反論してくるが、いずれも肝心の部分が欠落していて、「自分がやった」などを書いてくる。それでも石井部隊の存在は知らなかったし、まったく洗脳されて帰国した連中ばかりだった。

本多勝一らは「恐るべき証言をしている」など書いているが、捏造を信じればそうなる。

### 中国人 8000 人の連行

日本軍が組織的に中国人を強制連行したという。日本側の証言は少なくない。田辺氏の知る限り、中国抑留者に限定される。全員の証言を検証するのは無理だが、中心的な証言者 1 人を徹底的に追うことによって、他は推して知るべしである。

ここでは、自ら指揮をとって中国人 8000 人を強制連行したという小島隆男少尉の証言を追う。コレラ菌撒布にもでてくる人物である。この男の言うことが「真実」であれば、「肝腎の戦争をしないうで、悪いことばかりしていた」人物になる。

その話の中にでてくる「劳工狩り」「ウサギ狩り」は中国人の強制連行について語られるとき、必ずでてくる表現になった。

### 小島中尉の謝罪行脚と朝日新聞

1993 年 7 月 1 日付朝日新聞。「私は中国人を強制連行した」元機関銃中隊長贖罪・告白の行脚」

「山東省で、中国の人たちを強制連行しました。北京で、ウサギ狩り、劳工狩りと呼ばれた強制連行作戦の一員として、かつて村を包囲し、機関銃で撃ちまくった。本来なら生きて帰れぬ罪を犯しております」私は侵略戦争の実行者です。

男はみんな殺せ、との命令をうけ、農民も殺した。・・・1942 年といえば、まだ少尉だったはず。

1 個中隊が約 4 k m の横隊になって直径 32 k m の包囲網を作り、各隊には捕まえた村民

を渡すため、憲兵隊を配備、上空に各隊の進み具合を調整するため飛行機が飛び、通信筒を落としてデコボコを調整、さらに抵抗する村落には戦車隊で攻撃……

わずかな数の農民を確保するのに飛行機や戦車まで駆り出すだろうか？ 証明する方法がない、と思っていたらTVで「花岡事件」を報道。秋田県の鹿島組経営の花岡鉦山で、敗戦も近い1945年6月、苛酷な労働などにたえかねた中国人数十名が反乱を起こし、日本人補導員4名などを殺害、逃亡した事件である。

TVでは、1942年から4万人の中国人が連行され、全国35の企業に配置されたと説明している。拷問などを含む苛酷な当時の状況を語る。この番組に小島隆男中尉が出演し、8000人を強制連行したと説明。これを見ていた花岡事件に関心をもつ秋田市の藤原信悦は小島に胡散臭さを感じ取っていた。藤原氏の好意で、このビデオを田辺氏が見て、それまでの疑問が確信に変わった。

「虫けらのように自分の意の向くままに捕まえてきては殺し、捕まえてきては蹴つとばし、意の向くままやってきたわけです」ディレクターの「小島さんもそのようにやったんですか」「そうですよ。私中隊長ですもの。200名からの部下がいたんです。（中略）それは当時の軍隊ではありえない。率先してみんな悪いことをやるわけです。戦功をたてようとするわけですね。天皇制軍隊では」

田辺氏は、これでウソとわかったという。彼が中隊長のときの部下を含め7～8名の将兵から連行する作戦に参加したこともなければ、聞いたこともない、という証言を得ていたからである。また、「ウサギ狩り」は文字通り食料確保のためのウサギを捕獲することを意味する。

衛河決壊作戦やコレラ作戦も、つくり話の可能性が高い。小島と同期で、「天皇の軍隊」の冒頭に「けだもの」と書かれている中に名前が乗っている人がいる。千葉という。口を割らない子供の方を剣先でえぐる行為では、「私のこうした人間の良心では、考えられない行為をさっきからニタニタしながら見ていた小隊長は、『もう少しだ、これが成功したら進級だぞ！頑張れ』と励ましていた」という中隊長であった人である。千葉は、「ばか者が」と一言だけ。あとは無言。これを手記に書いている斉藤銀松の字は、写真ではきれいだが、梶野二一は、これを「自筆」ではないと言い、何を書いてあるかわからない字を書いていた、と証言している。

小島と千葉が直接会って、その段取りに10数名が会合を持ち、事実かどうか確かめた上で両者が3名（小島側）と7名で会談する。（……大変な苦勞である。アホが一人だと、これだけの人の手をわずらわせる。）

この場で千葉は、秋田放送の証言を取り上げる。「8000人の強制連行が中隊長のときと

あるが、そのようなことを私は知らないが」と尋ねる。児島は「それは44大隊のときではなく、12軍の予備隊付で勤務したときの話である」と答えた。実にあっさりとして放送時の言を撤回したのである。千葉が「それではウソではないか!」・・・返事をしない。

「8000人を捕らえたというのが本当か」

「・・・ただ自分が8000人捕らえたものではなく、12軍が情報で流したもので私は確認していない。どこへ送られたかも知らない」小島側の人間でさえ、「大きなことを言うからだ」と窘める場面もあった。

千葉は「80人の間違いではないか」と多分に皮肉をこめて言う。千葉の経験ではせいぜい数人の八路軍である。

「あちこちでこれらの行動を話しているうちに、マスコミなどで数字が変わったような気がする」と意味のわからないことを話す。

千葉は心優しい人で、それ以上戦友を追及するのは心苦しい、と言った。

千葉が参加した作戦で、少数の者が捕まり、本来なら銃殺にするとところ労務にまわす例があったかも知れない。しかし、少なくとも「劳工狩り」を目的にした作戦など聞いたことがないという。

「4万人強制連行」は、「幻の外務省報告書」がでてきて、(・・・小生には、偽者という気がする。あまりにもタイミングが良すぎる)これをNHKなどが信じ切って大々的に報道する。・・・NHKは報道機関を辞めたらいいと思う。真実を伝えていない。

強制連行は、北支派遣軍が軍を挙げておこなっていたのではなく、「討伐」という小規模な軍事行動から生まれた副産物である。討伐はそれぞれの部隊の上官の判断に基づいて行われていた小規模な軍事行動であり、敵の奇襲攻撃の危険がせまっているという判断が下されたときに、その都度行われた。駐屯地の周囲の治安を維持するため、余儀なく行っていた。

小島の8000人はNHKの注目を集めただけ。しかも軍レベルの話になれば「天皇制」も諸悪の根源という中帰連の主張を強化できると踏んだからだろう。

## 劳工狩り

1941年8～9月頃。手記は大木伸治軍曹。

池田中尉の「土百姓どもを一人も殺さず全部捕まえろ」の怒号のもと、150名を捕らえたとある。・・・池田中尉は、「温和で物静かな方で、勤務中、怒号を発するようなことは一回もなかった」「・・・色が白く小さな声の人でした。号令をかけるのに恥ずかしそうでしたね」この中隊にいた、あるいは、当時を知る人に質問したが、回答者全員が「強制

連行」を知らないと否定した。染谷鷹治は同期・同郷でお互いによく知っていた。戦友会に一度出席したが、劳工狩りが知られたせいで、その後大木は出席しなくなったという。

例の小島という男のヨタ話は、だんだんエスカレートする。「当時私には懸賞金がついていたでしょう、おそらく・・・日本の鬼の典型だったわけですよ」ところがかつての部下に尋ねると「いるのかいないのかわからないような中隊長でした。率先して何かをやる中隊長ではなかった。」別の部下も「小心な人でした。兵隊に対して温和に接した人です。残虐なことはありません。何の都合か法螺を吹いているようです。」

精神科も受診しているが、その分析では「罪悪感を感じていないようだ」・・・あたりまえで、何も悪いことをしていないのだから。この教授もデッチ上げ話とわかったら、そんな「分析」をする必要もない。NHKでとくとくと語っていたらしい。間抜けた話。

軍隊経験者は、自らの軍歴を实によく記憶している。いつ、どの部隊に入隊し、上官は誰か、所属変更に伴う部隊名、進級時期、階級などである。

別の中隊長は、人肉を部下にふるまってやったという。・・・中隊長が兵隊の副食を作るかあ？ あとは書くのも嫌な猟奇的な事件をいくつもデッチ上げている。

「天皇の軍隊」や「中国で日本人は何をしたか」の内容はおおむね上記デッチ上げばかりである。よくまあ、信じるなあ。

**城野宏**という著名人がいる。その道では有名らしい。小生は知らなかったが、三光作戦にかかわる証言をしている。死んだとき、政治家などが葬列に並んだという。

その証言とは、いわゆる「南京大虐殺」のあとの話だが、華北は一致しているが、1940年頃という説と1940～1943年とにわけられている。そんな作戦はない。1940というのは、南京だけでなく、中国全土で「三光」作戦が行われたと言いたいらしい。

1940年北京の北支方面軍司令部で兵团長会議が開かれ、篠塚中将が中心になって晋西北作戦命令が下される。この作戦では、大前提として“燼滅作戦を実施す”となっていて、①敵地区に侵入せば、食料はすべて輸送するか焼却し、敵地区に残さざること②家屋は破壊、又は焼却すべし③敵地区には人を残すな、敵と協力するおそれのある人間は治安地区に居住させる等の手段を講じて、その場に存在させないように、というイミのことが書かれてありました。

つまり城野は、軍レベルの作戦命令などの記録類を見た上で証言したことがわかる。

そこでいろいろ証言し、たとえば妊婦の腹を裂いて胎児を取り出し、アッ汚いと傍らの石にぶっつけて殺した、という。

事実とすれば鬼畜の振る舞いである。

ある村では、女子供を6人洞窟に放りこんで、たきぎを投げ込んで焼き殺した、とか。あと、ここでは書きたくないような残虐なことをしでかしている。

田辺氏は、まったく読むに耐えないので、これ以上書きたくないといい、……だが、常識的に考えてこのような出来事が仮に起こったとして、記録に残るものだろうか。

城野宏の肩書きが「山西野戦軍副司令官」とある。ところが、副司令官というのは、戦後のもので、山西省軍閥の首領が、国府軍の指揮下にあったものの、独立を企図していた。で、日本軍が1万人残留して共産八路軍と戦うことになった。そのときの肩書きで、副司令が正しい。

染谷金一の話では、幹部候補生出身の中尉だったという。残留が命令か志願かで、軍人年金の問題もあり、命令説が正しそうだが、「城野は、なんでも自分の手柄にする」と戦友たちは語っていたという。

結局、城野の軍歴を解明し、すべて伝聞であることがわかる。

女をなぐさみものにして殺し、子どもまでを抹殺するという、“燼滅作戦”に対し、30人以上に聞いたが、ある人は不快そうに「そんな話は聞いたこともないし、そのような命令を受けたことはない」と否定し、ある人は苦笑する。

城野の思想、信条の無節操と時の権力者についての遍歴からみて、その時の自分の都合のいいように「三光作戦」を書いた、というのが実情と思われる。

平岡正明著「日本人は中国で何をしたか」を読んだら、城野証言だらけで、救いようがない。

「内地勤務中の事件まで、まことしやかに、恰も見たように語られていることは、彼が赴任後、職務を通じて知り得た情報から」このようなことを聞いていると取材相手に話した。平岡氏が、この頃にどこかで城野氏と会っている筈だが「聞いたこともない」と取材自体に疑問を投げかけていた。

劳工狩りと書いているのは、中国抑留者の5人のみである。

山東省でやった劳工狩り作戦は、59師団中心で、村を取り囲み50人の組に縛り上げて人狩りをし、収容所にもってきて、各地へ配分するわけです。主として満洲と内地でしたね。内地へはこのとき1000人あまり、青島から輸送船で送ったんです。船の来るまで砂浜に鉄条網をはって、そこに放りこんでおいた。メシもろくに食わせず、ここで三分の一の300人余りが死んだ。フラフラの彼らのところに憲兵がやってきて、拷問したりしました

ね・・・」59師団は、第12軍に所属。城野は、第1軍だけでなく、12軍の内情にも通じていたことになるが、あり得ないことだと記した。

城野の大物意識、自己顕示欲の強さが、さもさも見てきたような証言になったものと思う。

「中国の旅」の中に、潘家峪事件というのがある。天津から列車で2時間の唐山、さらに65km行くと潘家峪村があり、その小学校に着くと、県の革命委員会の代表らが本多記者を出迎えている。そして歴史的な生き残りの男性が語る。

「日本軍は美しい山河を蹂躪し、あちこちに砲台を築き、壕を掘り、食料を奪い、人夫を拉致し、婦女を強姦し、家を焼き、勝手気ままに人を殺しました。

偉大な毛沢東主席は、『全国の同胞よ。中華民族の危機を救うには、全民族の力を動員して抗戦しなければ活路はひらけない』と戦闘的に呼びかけました。ここの住民も遊撃隊(ゲリラ)を組織し、不屈の戦闘をくりひろげたのです。道路を破壊し、敵の通信機を切断し、手製の地雷を使って待ち伏せ攻撃もしました。すると、日本軍は、ここを無人地帯にしてしまおうと無差別大殺戮をたくらみました。3000人の日本軍と2000人の傀儡兵がひそかに村を包囲し、住民1500人のうち、村外にいた200人を除く、ほとんど全員1230人を殺害した」という。

お定まりの虐殺が始まるのだが、たとえば5歳の女の子を母親から奪った兵隊は、その両足をつかんで振り子のように大きく振って頭を石にぶつけ、叩き割った。腹を裂かれた妊婦が4人という。・・・もう、無視するしかない。

日本側の言い分は、事件にかかわった部隊は、27師団隷下の支那駐屯歩兵一連隊である。内海戦友会会長は、事件のあったことは事実です。あの部落は、「通匪部落」でいつも日本軍がやられていたところであり、それなりの理由もあった。「殺さなければ殺される、これが戦場の現実なのです」と淡々と話す。

事件発生日が日本側と中国側と異なっているが、日本側の証言では、初年兵を討伐にだすことはないから、日本側の説が正しい。

討伐行動に行ったのは、諸説あるが、100人くらい。「あれ(襲撃)は計画的だった。でなければああはいかない」村は盆地のような低いところにあり、多くの村がそうであるように塙で囲まれている。機関銃隊は、村を見渡せる小高い位置に重機を据える。住民を中庭に集め、機関銃を撃ち込む。ださせたコーリャンに火をつける。「兵隊はいやなものだな」と思ったという。また村の指導層(?)20人くらいを射殺するところを目撃したともいう。

村民の反抗はみなウソだ、という。村の中に、日本軍を接待するもの、八路軍を接待す



るもの、にわけて対応していたという。

人民が立ち上がって日本軍に抵抗する。それを鎮圧するため日本軍が皆殺し作戦を展開する、という「三光作戦（政策）」の話の組み立て自体が虚構なのである。

3人の師団長が手記を書いている。鈴木啓久団長の手記の一部を後述する。

中国抑留者は、ソ連に拉致された6万人のうち、中国にひきわたされたのが969人、山西省では、敗戦後も国民党軍に強く要請され、共産軍が勝ったため、捕虜になったりしたものが140人、合計1000人余。その他、師団単位で捕虜になったのも含めて、1500人くらいになる。

「洗脳」の語源は中国にある。

洗脳の段階は、

1. 反省学習の段階
2. 罪行を自白する段階
3. 尋問の段階

俗に言う監獄病で、自殺を企てたり神経症になったりする人も多い。

鈴木師団長の部下に、藤原彰元一ツ橋大学教授は、三光政策はすべて事実だというのが、焚き火の煙が舞い上がっているのを見て“毒ガスだ”といった。朝日新聞はとびつく。こいつの言うことが信用できますか？・・・・中隊長だったが、残虐どころか、ほれぼれするような紅顔の青年将校だったと、10人の元部下はいう。ひとりだけ、部下を悪く言う隊長はだめだ、という。意外だったのが、討伐行動に同行した記憶がない、あったのだろうが、覚えがない。ちょっと当て外れでした。

### 鈴木師団長の手記

昭和38年によく帰国できた。たとえば魯家峪で200人あまりを殺害したことや、住民を10万人単位で移住させたりした。農民1000人を虐殺した（場所も時期も書いていない）ことなどを、拘禁中に書かされた。三光作戦とも書いているが、帰国後、「回想録」を遺した。

「国民を不幸のドン底に引きずり込んだ一部軍人『政治家』の犯罪と、国策の犠牲となり戦場を馳駆した『軍人』、甚だしきは国家権力によって徴集された人々に対してまでも同じように非難し嫌悪し、遂には国賊を以って擬しようと務めてさえいる」とし、「在る者は此等尊い犠牲者に対する慰霊をさえ拒み、甚だしきに至っては国賊でもあったかの如き暴

言を浴びせ・・・」と現状を強く憂慮している。また、「私の目に映ずるところからすると今や世を挙げて金銭の奴となり・・・」と世相を憂い、「今や祖国の若人達よ何を以って人生の生き甲斐として励んでいるのであるか。祖国日本は何れの方向へと向かって進もうとしているのであろうか」とも記している。

鈴木中将は、1982年12月、会津若松市の自宅で92年の生涯を終えた。

筆者の感想は、書いていて虚しくなります。数人のアホウのために、日本全体、日本人あるいは日本という国家が貶められて、またそれを信じきってしまう連中のためにどれほどの国家的損失が払われてきたことか。そういうデッチ上げを否定するために、いったいどれほどの時間と労力が費やされてきたか。

余程に想像力がたくましいのか、抑留者だったら手記を向こうがいいと言うまで書き直しを要求され、なかには進んで相手に迎合し、ありもしない出来事を積極的に書くのもあるだろう。しかも、嘘を書きながら、あるいは語りながら、いつの間にか「事実」と信じ込むのまでいるだろう。

最近、朝日新聞による「捏造」記事が、いくつも明らかになってきて、(これについては、山ほど情報がある。改めて書く予定です)朝日もしぶしぶながら認めざるを得ない状況にある。(無論、朝日新聞側は、「誤報」で突っぱねるつもりであるが) **無知でもダメだが、恣意的・意図的に「誤報」をつくりだすのを「捏造」というのです、(朝日新聞の人は理解していないようですが)**日本語では。単に地名を誤ったとか、時間を勘違いしたとかなら「誤報」でもやむを得ないが、それでもできる限り、誤報をなくすためできるかぎりウラをとるといふ基本的な努力をするべきだろう。緻密な取材によってのみ可能なことですが、そこまで緻密な頭脳をもっているかどうか。

いつの日か、上記一連のデッチ上げを、「誤報」でした、などと言うんじゃないだろうな。この次は32年後やなしに50年後とか。

それにしても、田辺敏雄氏の真実を知るために払った努力と執念に対しては、脱帽せざるを得ない。

2014.09.30.